

「沖縄の怒り」

2015年03月02日

井上良雄先生を中心に、数名の牧師、信徒たちが編集同人になって、『時の徴』という季刊誌が発刊され、先生亡き後も継続発刊している。50頁くらいの小さな冊子であるが、神学的にしっかりした論文が掲載され、読み応えがあり愛読している。読者が多いと聞く。

妻の妹の久保礼子牧師は7年前、沖縄の教会で奉仕したいと沖縄に行き、現在は「よきサマリア人伝道所」の牧師をしている。久保牧師は『時の徴』の同人の一人で「ちゅら礼子通信」を連載している。第142号に「沖縄で七回目の冬に」と題して次のように書いている。沖縄で7回目の冬を迎え、以前より「寒がり」になった。沖縄の暖かさに慣れたためか、日中の暖かさと朝夕の寒さの「寒暖の差」について行くのが大変になったと書き出している。そして「寒暖の差」を、沖縄でなされていることへの「沖縄」と「本土」の受け止め方の「温度差」と言い変えている。沖縄の人々の意志が無視されていることを「肌で感じる」ようになり「目の覚めるような寒さ」「息もできなくなる寒さ」だと言う。

選挙で、辺野古に新基地を作らせないと公約した人々が当選し続けている。参議院選挙で糸数さんが選ばれ、名護市長選挙では稲嶺市長が再選され、同市議会議員選挙も勝利した。県知事選挙では翁長さんが10万票の大差で当選し、那覇市長選挙も城間さんがダブルスコアで勝利した。更に、衆議院選挙でも「オール沖縄」で4人の候補者は完全勝利した。これ以上ないほど、沖縄の民意がはっきりと示された。沖縄の米軍基地は「銃とブルドーザー」の有無を言わせぬ暴力で作られた。今度、普天間基地を辺野古に移設すると、県民が認めたと受け止められる。それは、断じて許さないという主張が痛いように伝わってくる。しかし、安倍政権は民意を無視して基地建設を強行に進め、反対する県民を圧迫し、拘束者まで出している。久保牧師は、基地問題は「本土」の多数の人々にとって自分の問題になっていない、そして、安倍政権の強行策は「人権無視」「非民主主義」であり「それを、『本土』の選挙民は許してしまっています」と指摘している。

岩波書店の月刊誌『世界』はリレーコラム「沖縄（シマ）という窓」を連載している。3月号は「沖縄への暴力 振るわれたい決意と振るわせたい決意」と題して親川志奈子氏が書いている。「私」を沖縄、「彼」を日本と置き換え、次のように譬えている。「見るからにアザだらけでボロボロであっても『彼は私のことを愛してくれている』。『私にも悪いところがあるから』と頑なになってしまったり、一度は別れを決意したものの『でも今度こそ分かってくれるかも』『今までの恩もあるし』とずるずると関係を維持してしまうことも多い。」また「沖縄人がDV被害者やそのサバイバーであるならば、私たち沖縄人から見て、日本人はさながらDV加害者のような存在だと感じるからだ」と書いている。

親川氏は、更に続けている。被害者に同情し暴力を憎むことは容易である。被害を知り、支援することは「必要最低限」の行為であって、それを「解決」と見なすことはできない。加害者が振り下ろす拳を止めることは困難であるが、それができるのはマジョリティである日本人である。沖縄への暴力を許さないという日本社会の意識形成が求められている。「辺野古に反対」「沖縄がんばれ」の声だけでなく、そのために立ち上がる日本人になり、そして、自分の住む地域から辺野古移設反対を主張する政治家を生み出すことである。親川氏の日本に対する怒りは激しい。久保牧師は「沖縄」と「本土」と言い、親川氏は「沖縄」と「日本」と言っているが、同じ痛みと怒りを表している。本土人として恥ずかしい限りである。私は「本土が沖縄化」しなければ、民主主義も平和も守れないと思っている。